

浦賀文化

令和元年（2019年）10月1日

第59号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

旧浦賀町のリーダー 高橋勝七家

明治三二年八月から四年もの間、浦賀の第五代町長を務めた高橋勝七。親子二代にわたり横須賀・浦賀の発展に大きな功績を残しています。

観音崎大橋から眺める鴨居の海には、遠景に房総半島が横たわり、近景にはウミウの群生する岩礁が見られ、その光景は三浦半島の中でも指折りのものと言えます。こうした豊かな自然に恵まれた美しい風景の山側に、歴史を感じさせる家並みがあります。これが、今回ご紹介する第五代浦賀町長を務めた高橋勝七の屋敷です。大橋の下に見える浜辺は船の発着場として利用されていたといえます。高橋家は、かつて「若松屋」という屋号で呼ばれていました。この「若松」とは、会津若松のことです。では、高橋家の屋号は、なぜ会津若松に由来するのでしょうか。高橋家のある鴨居には、江戸時代の文化七年（一八一〇年）から文政三年（一八二〇年）まで会津藩の陣屋が置かれていました。当時の豪商・高橋忠左エ門が会津藩の御用商人として藩の物資調達に貢献したことから、会津藩より「若松屋」の屋号を賜りました。これが「若松屋」の由来です。当時の高橋邸母屋は東京小石川の「伝通院」の建物を海路で運んだもので、現代家屋

では見られなくなつた造りや細工が施された豪邸そのものだったようです。その高橋邸を明治天皇が訪れたという記録があります。

明治十四年（一八八一年）、観音崎砲台天覧のため浦賀港に到着した天皇は、西叶神社鳥居前に仕立てられた棧橋から上陸されました。わずかな距離でしたが馬に乗られ西叶神社境内にあった西岸学校へ行き、二階の部屋で休息されました。その後、観音崎砲台建設の様子をご覧になった帰途、御小休所として鴨居の高橋家に立ち寄られました。西叶神社の境内には、この時の行幸を記念して「明治天皇駐蹕之跡」という石碑が建立されています。（石碑の「蹕」は馬へん）

高橋家に養子として入つた初代勝七は、大津村の名主を務めていた小川家の出身です。この小川家には初代の三浦郡長を務めた小川茂周がおり、勝七は茂周の実弟でした。明治十一年（一八七八年）から十二年にかけて、茂周と勝七は大滝町から東側の海面の埋め立て事業を行いました。そのときに使われた土砂は、現

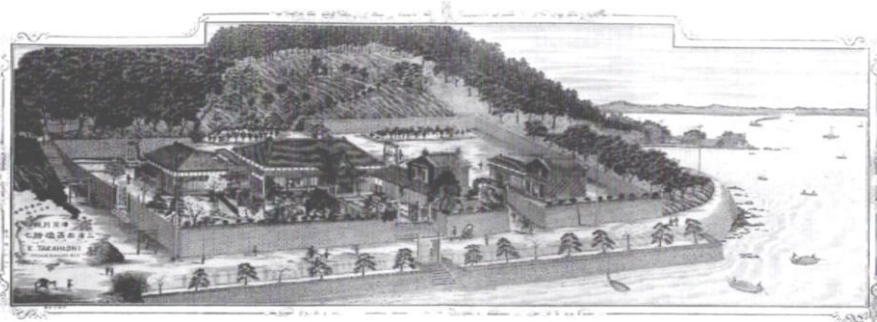
在の横須賀中央駅から三笠ビル周辺の崖を崩して得られたものといえます。ここにできた土地を『若松町』と呼び、今では横須賀市の中心部に位置しています。これと相前後して、現在の市役所がある『小川町』も、茂周による埋立てにより生まれました。

二代目勝七は、浦賀の町会議員や、浦賀町長（明治三二年と二六年）を務めたのち、郡会議員や郡会議長を歴任し、明治三十七年には神奈川県郡部選挙区において衆議院議員に当選しました。また、浦賀銀行（後に関東銀行）の取締役を務めるなど、政財界のリーダーとして活躍しました。

明治・大正期の実業家辞典によると、二代目の勝七は、明治十五年に家督を相続、襲名して遺業を継承し関東銀行の取締役（後に頭取となる）となり、天性温厚にして行務を見るに親切周到なり、浦賀方面の金融は君に依りて常に活況を呈すると同時に、生産事業の年々発達するのみに君が銀行事務の伸縮その宜しきを得るに基因する」と絶賛されています。

一方、子孫により蔵の中から発見された絵図によると、鴨居の亀崎半島周辺に養魚場をつくり、タイやスズキ、アワビ、サザエ、イセエビなどを養殖する栽培漁業を計画し

ていたことが分かりました。そのことから、リーダーとしての勝七の進取の気性と、地元漁業者に対する生活の安定を図る姿勢と努力の跡をうかがうことが出来ます。（芳賀久雄）



銅版面に描かれた高橋勝七邸（明治27年頃）

★参考文献

- ・横須賀人物往来 田辺 悟
- ・三浦半島の史跡みち 鈴木かほる
- ・明治天皇行幸の軌跡*鎌倉・横須賀・浦賀 横須賀の文化遺産を考える会



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その九

郷土史家 山本 詔一



● 目付・松平らの 海防見分一件② ●

相次ぐ軍艦の来航に危機感を覚えた幕府は、海防掛御目付の松平近韶に、現在の千葉から静岡にかけての東京湾沿岸部にある御備場を見分するよう命じた。

弘化三年（一八四六年）九月、近韶一行は、見分のために浦賀奉行所を訪れていた。その際、奉行所へ浦賀の防備体制について書面でいくつか質問をおこなっていた。

◇ ◇ ◇

（前回からの続き）

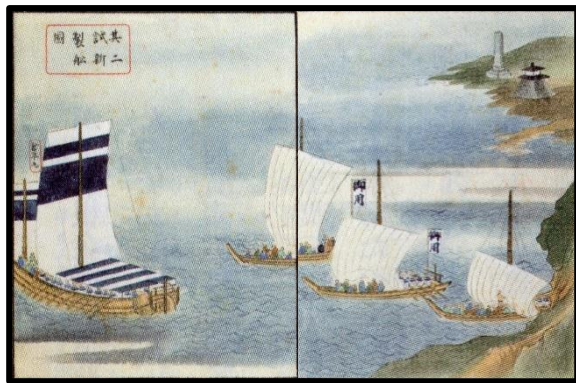
さらに別の解答書の中に、「浦賀沖は長崎と違って湾が広いので、番船の役割は異国船を見張っていることが通常。しかし異国船から小船を御した場合は、すぐさま漕ぎ出して制止をする。また、最初から敵意をもって入港してくる異国船には、それだけの覚悟を持って臨んでいる。しかし、穏やかに入港した後、突然敵意をあらわにして戦争を挑んでくるようなことがあれば、小船ばかりの警備である当方ではとても対応はできない。」と、「やはり、「もしも異国船が内海へ入ろうとすれば、富津や観音崎の台場で食い止めることは不可能であろう。今の警備では甚だ覚束ない。」と、ビッドル艦隊のような軍艦には対処できないのが現状であると

伝えていた。これはビッドル艦隊の圧倒的な兵力を前に、討ち死にする覚悟で対峙した浦賀奉行所の面々の心の叫びであった。そして、「日本にも大船の軍用船が必要である。しかも軍用船は、浦賀奉行所だけでなく、房総・三浦を守る両家にも用意が必要であろう。」と、西洋の軍艦に対抗するために日本にもそれ相応の装備が必要であることを述べた。当時幕府は、浦賀で洋式軍艦を建造できないかと考えていたようである。長崎からオランダ人を呼び寄せることなく日本人だけで洋式軍艦を建造できないかとの質問も行っている。「洋式軍艦を現状の日本の船大工だけで建造することは難しい。大型の廻船を一艘建造するにも三〇人以上の船大工で五か月以上を要す。手慣れた船の建造でもこれだけかかるのに、外見をみただけの洋式軍艦を建造するのにどれほどの日数が必要なのかかわからない。もし建造出来たとしても、オランダ人の指導がなければ軍艦を操ることもできない。実現性は低い。現時点では、船上から大砲を発射できる大きさの和船を日本の船大工に建造させるべき。」と回答している。

この問題については、その後も賛否両論さまざまな意見が交わされたが、どちらも江戸を守るには陸上の警備をどんなに厚くしても、守り切

踊りの輪抜けて一息永水 田島清一郎

（俳句の散歩道）



蒼隼丸乗試しの様子

れないことだけはわかっていた。弘化四年（一八四七年）、幕府は戸田、浅野の二人を浦賀奉行とし、ついに、嘉永二年（一八四九年）、小型ではあったが、大砲を備えた「蒼隼丸」という和洋折衷の船が浦賀で建造された。

笑話一題

散歩が趣味の私は、県道二〇八号線沿いのプロムナードを良く歩き、ベンチで休憩したりしています。そんな時にいくつかある植込みに咲いている野草の種類が意外に多いことに気がつきました。浦賀に通うようになって三年がたちますが、一年目は、シロツメグサやヒメジオンなどよく見かける花のほかにトキワハゼやコメツブツメクサなどを見つけたことが出来ました。二年目には、ミヤコグサが黄色い烏帽子のような花を咲かせていましたし、三年目には、少し変わった花を見つけました。その花は78年前に京都で発見され、マツバウランと名づけられた帰化植物です。数年前から三浦半島で見かけていましたが、浦賀で見たのは初めてで、おそらく風に運ばれた種が根づいたようです。プロムナードの狭い植込みでも意外に種類が多く毎年季節ごとの発見があり、散歩に彩りを添えてくれます。

（千葉県児）



photo.jp - 17605576

浦賀奉行所開設 300 周年記念事業 プレ企画展

「のんびいぶらぶら 歴史のまち 浦賀まるごとガイド展」

会場：浦賀行政センター3階集会室

【山本詔一さん講演会】

10月4日 13:30～15:00

【企画展示】

10月5日～13日 10:00～16:00

共催：浦賀コミュニティセンター分館 浦賀探訪くらぶ

問い合わせは浦賀行政センターへ

☎046-841-4155

浦賀文化のバックナンバーがご覧いただけます

(<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2490/uragabunka/>)

